

# 急がれる能登半島地震復旧・復興

# 「デジタル遺跡踏査」普及に注力

能登半島地震から2年が

過ぎた。復旧・復興事業が急がれる中、文化財包蔵地区での対応が事業実施の課題に浮上している。工事の途中で文化財が見つかり発掘調査が必要になれば、工程を再検討する可能性もある。日本文化財保護協会（山口寛理事長）はこうした事態を未然に防ごうと、地表に露出した埋蔵文化財（遺跡）が存在する可能性の高い地点を予測する「デジタル遺跡踏査」の普及に力を入れている。

「復興は一秒も遅らせてはならない」。同協会の那波市郎相談役はそう訴える。災害の復旧・復興工事にスピードが求められるのは当然だが、文化財の保護もおそらくにできない。遺跡への配慮は欠かせないが、復

興を止めるわけにはいかない。この問題に対処する姿勢として、同協会の鶴飼良

# 文化財保護協会



石川県志賀町の古墳群でアプリなどを使った測量実習をした

「事前の把握が重要になる」

座学やGISデータ作成を学んだ

置や規模の見当を付けることができる。事前に候補地を絞り込めば、調査に必要な時間やコストが抑制できる。

られる。同協会は後押しつけで、石川県内の自治体職員や企業関係者を対象に1月26、27日の2日間、「デジタル時代の遺跡調査」と題して、石川県内の自治体職員や企業関係者を対象に1月26、27日の2日間、「デジタル時代の遺跡調査」と題して、

「事前の把握が重要になる」と強調する。

A man with glasses and a dark sweater is speaking at a podium in a lecture hall. He is gesturing with his hands as he speaks. In the foreground, the backs of several students' heads are visible, looking towards the speaker. A large speaker is mounted on the wall above the podium.

手法の整理に取り組んだのが、国立文化財機構奈良文化財研究所の高田祐一氏

題した技術研修を同県で開催。約40人が参加した。高

事前に遺跡の位置を把握する手掛けりは、市町村が作成する「遺跡地図」だ。周知の埋蔵文化財包蔵地の分布や概要が分かる資料で、工事計画時の判断材料となる。ただ、地図を作成するには人が歩いて遺跡を調査する必要があり、調査が十分でない地域もある。人手不足や踏査時の安全確保といった課題から、現地を歩いて網羅的に調査する方法は限界があった。

A photograph of a lecture hall. In the foreground, the backs of several students' heads are visible. In the middle ground, a man in a dark suit stands at a wooden podium, facing the audience. Behind him is a white projection screen displaying a presentation slide with text and diagrams. The room has a high ceiling with a long fluorescent light fixture.

手法の整理に取り組んだのが、国立文化財機構奈良文化財研究所の高田祐一氏だ。遺跡調査分野で十分に活用していなかったGISデータに着目。手順を整理し現場で応用できるようにした。デジタル遺跡踏査を進める上で、高田氏は「地域ごとに公開されているデータの形式や精度が大きく異なる点を課題に挙げる。地形や遺跡データが高精度な精度が向上し、業務の効率

題した技術研修を同県で開催。約40人が参加した。高田氏や野口淳公立小松大学次世代考古学研究センター特任准教授らが講師役を務めた。1日目は座学とG I Sデータ作成の実習、2日目は志賀町内の古墳群で現地実習を実施した。3Dスキャナーアプリなどを使用し、測量など実務を想定した内容を学んだ。スマホやタブレットをかざして古墳の周囲を歩く参加者の姿が見られた。

「復興工事が本格化する

課題に対応する画像解析の手法の一つとして、国や県が公開しているG I S（地理情報システム）データを活用したデジタル遺跡

手法の整理に取り組んだのが、国立文化財機構奈良文化財研究所の高田祐一氏だ。遺跡調査分野で十分に活用していなかつたGISデータに着目。手順を整理し現場で応用できるようにした。デジタル遺跡踏査を進める上で、高田氏は「地域ごとに公開されているデータの形式や精度が大きく異なる点」を課題に挙げる。地形や遺跡データが高精度になる点を課題に挙げる。地圖の精度向上につなげる。実際にデジタル遺跡踏査や別の手法を活用し、遺跡化にもつながる。精度が向上し、業務の効率化にもつながる」とみる。

題した技術研修を同県で開催。約40人が参加した。高田氏や野口淳公立小松大学次世代考古学研究センター特任准教授らが講師役を務めた。1日目は座学とG I Sデータ作成の実習、2日目は志賀町内の古墳群で現地実習を実施した。3Dスキャナーアプリなどを使用し、測量など実務を想定した内容を学んだ。スマホやタブレットをかざして古墳の周囲を歩く参加者の姿が見られた。

# 石川の古墳群で実務想定し技術研修

「遺跡踏査して知る」ことの「楽しさ」を「れば」とデジタル遺跡踏査の普及に期待する。